慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジェル・C・リマースマ マックス・ウェーバーの《プロテスタンティズムの倫理》をめぐって
Sub Title	
Author	渡辺, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.6 (1961. 6) ,p.511(75)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610601-0075
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610601-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ものといえよう。

しかし乍ら、b/nb的接近の本領は過去の趨勢の記述説明よりも、将来予測にある訳であり、単に基礎的産業の識別に止まらず、これら基礎的部門の生産物に対する全国的な需要と関連させての将来予測がなされねばならない。だが、本書では、シカゴ経済の予測をするに当って、この方法をとらず、全くことなった方法によって予測を試みている。即ち、現在の工場、施設投資が将来の生産を決定するという自明の理にもとづいて、全国に占めるシカゴの工場、機械設備支出と附加価値との比率をもってシカゴ経済の予測をしている。この比率、即ち資本効率が、若干の修正ないしは考慮を加えれば、全国各産業の産出量に於けるシカゴの将来の役割を示す最も端的な指標であることはいうまでもなかろう。筆者は一九四七―五七年の製造業の資本効率と雇傭率を比較し、一方に於て鉄鋼業が将来もひきつづきシカゴの経済的基礎を構成するが、他方、他の製造業、特に電気機具、印刷出版、合金、食品等の全国に占める割合は次第に減少すると予測している。勿論こうした趨勢分析は先にも指摘した様に、全国的、又国際的な需要動向との関連に於て把握されなければならない。シカゴの景気変動に対する反応はこうした意味で極めて重要であるが、この点で興味あるのは、本書にみられるシカゴについての指摘であろう。筆者は、シカゴ経済が一九二九年迄、即ちシカゴが合衆国全体に比して急速に発展していた時期には、景気変動に対しては比較的不感応であったのに対し、一九二九年以降は全国よりも不安定となり、景気変動の波もよりシャープになり、かつ回復もおそくなったと述べている。このことは、景気変動の影響が一産業に特化している中小都市に於てより大であるとする従来の説とあわせて、規模別と産業構造別による都市の景気変動に対する反応の仕方に関して興味ある問題を提供しているように思われる。

以上、特に興味ある事柄を中心に本書の内容を紹介してきたが、これら指摘からも知られる様に、本書の特徴はシカゴという大都市の経済分析に主眼をおき、可能なかぎりの統計資料を用い、これを配分分析と比較分析との補完的併用や産業構造とb/nb的接近等、種々の方法を駆使して処理していることであろう。この結果、各方法に関する理論的裏づけや技術的処理が深化されなかったといううらみはあるが、それはそれとしてこれら従来個々別々に用いられてきた方法を一地域に適用し、シカゴ経済の全貌をヴィジュアライズしたことは貴重な試みといってよいものである。たしかに「ここに示された技術的・理論的諸問題はすべての大都市経済の分析に共通のもの」であり、この意味で、本書は今後の地域経済研究に関して一つの出発点を示したといってよかろう。

新刊紹介

ジェル・C・リマースマ『マックス・ウェーバーの《プロテスタンティズムの倫理》をめぐって』

ウェーバーは資本主義を営利欲求と解した。営利欲求は歴史と共に古い。かかるものとして資本主義は社会経済の一つの構成要素として存在し続けて来た。しかしその現象形態は歴史的条件に規定されて多種多様であった。今日の資本主義にウェーバーは合理的性格を見出そうとした。

ウェーバーのいう「合理」とは何か。リマースマ氏は第一にこの点に関説している。氏によれば、ウェーバーはそれを伝統主義に対置させて考えていた。営利欲求が因襲を乗越えて進むこと、それがウェーバーのいう「合理」であった。従って「拡大」と同義語に解されていたわけである。もはや経済活動を妨害すべき伝統的な枠は存在しない。しかし中世においてはすべてが因襲に拘束されていた。経済活動の目的は伝統的様式の維持にあり、それから一歩も出なかった。今日の資本主義は「拡大」をめざし、中世のそれとはまったく反対の存在である。また氏によれば、ウェーバーは「合理」ということで同時に、冒険主義の克服された状況と解していた。その限り「合理」とは「持続」の同義語であった。經済活動を「持続」のうちに成功させるためには「予測」と「組織」が必要となる。今日の資本主義の繁栄は複式簿記と法律制度の完備を離れて考えられない。ウェーバーは「官僚制」のなかに「組織」の完成をみた。

営利欲求を「合理」のうちに完遂する。と同時にそれが「倫理」として強要されている。この二つが西ヨーロッパでは表裏の關係にあった。従って第二には、資本主義を支える精神的基礎の問題がある。ウェーバーのいわゆる資本主義精神の問題である。リマースマ氏は続いてそれをめぐるウェーバーの所論について関説している。ウェーバーのいう資本主義精神とは、極言すれば、フランクリンの「倫理」であった。具体的な唯一の例にフランクリンの言葉を掲げ、それこそが資本主義精神であるとする。ウェーバーによれば、こうした個人の思想を大量現象としての資本主義精神にまで高めたのは、「宗教の変革力」であった。資本主義精神はかかるものとして資本主義の発展に大いに寄与した。ウェーバーがそう考えることができたのは、「宗教の変革力」を高く評価したためであった。むしろ過大評価してはいないか。これがリマースマ氏の率直な疑問である。最近ウェーバーに対する批判が多い。この論文もその一つであるが、初めてウェーバーを読もうとする場合の手引ともなろう。

Jelle C. Riemersma. Max Weber's "Protestant Ethic": An Example of Historical Conceptualization. Explorations in Entrepreneurial History, I, 1949, 6, pp.11―19. 平 300.

―渡辺國廣―